

学 位 論 文 題 名

訪日外国人における観光の態様に関する実証研究

－留学生と親族訪問客を事例として－

学位論文内容の要旨

訪日外国人客（訪日外客）を増やすことは日本における観光政策の重要課題である。しかし、2010年に訪日外客の旅行者数を1,000万人にするという政策目標の達成は困難な状況にある。そうした中、訪日外客の一部と位置づけることのできる留学生の人数は、増加傾向にある。また、日本政府は留学生30万人計画を発表し、留学生受入を推進している。留学生は、日本に居住する外国人として、日本国内を旅行することなどを通じ、日本における観光業や地域経済の振興に貢献することも期待される。さらに、留学生の増加は、留学生に会うために海外から日本に来る留学生の親族や友人を増やす効果も期待される。留学生や親族友人訪問（Visiting Friends and Relatives）を目的とした外国人来訪客（VFR客）については、観光市場における重要なセグメントの一つとしてとらえられ、国際的には多数の研究例がある。しかしながら、日本において、留学生やVFR客に着目した観光研究は少ない現状にある。

本論文の課題は、訪日外国人の来日期間中における観光の態様を、実証的に明らかにすることである。分析対象とする訪日外国人は、留学生と親族訪問客とした。分析方法として、従来の観光研究で多用されてきたアンケート調査だけでなく、毎日の生活行動すべてを時刻ごとに調査する生活時間調査という手法を観光研究に適用し、訪日外国人の詳細な観光実態に関する事例分析を実施した。分析対象者とした訪日外国人は、次の通りである。第1に、留学生の観光動向を解明するためのアンケート調査対象者は、北海道大学（北大）に在籍する留学生とした。第2に、観光実態に関する事例分析の対象者も、北大に長期に在籍している留学生ならびに外国人研究者に会いに来日した親族と、その親族受入側である留学生ならびに外国人研究者とした。北大はアジアからの留学生が多く、とりわけ中国からの留学生が国別では最大である。今後、中国からの訪日客は、大幅な増加が期待されていることから、実態調査の対象者は中国人とした。これらについて、以下の分析結果を得ている。

第1に、日本における親族友人訪問客の動向と特徴を、統計データ分析によって解明した。親族友人訪問客は、訪日外国人全体と比べ、中国・欧米、女性、主婦、同伴者なし、個人旅行の比率が高い傾向にある点を明らかにした。親族友人訪問客は、訪日外国人全体よりも、長期間滞在する傾向にある点、また、親族と友人の家に泊まるだけでなく、旅館やホテルなどの宿泊施設も利用する傾向がみられる点も明らかにした。

第2に、北大留学生を対象者としたアンケート分析を通じ、留学生の北海道内（道内）における観光動向を解明した。留学生の道内訪問先および道内観光目的は、外国人観光客全体と似ている傾向がみられる点、また留学生は外国人観光客全体よりも、宿泊日数が少

ない点を明らかにした。留学生は、外国人観光客全体よりも、道内観光全体に対する満足度が低いという傾向がみられる点も明らかにした。

第3に、北大留学生データを用いた統計的検定を通じ、日本語会話能力の違いが観光行動にどのような違いをもたらすかを解明した。日本語の会話能力が高い留学生は、低い留学生よりも、多くの観光地を訪問し、ドライブや郷土料理を楽しみ、ホテル・旅館に宿泊し、またインターネットから観光情報を入手している傾向がより強い点を明らかにした。

第4に、北大留学生データを用いた統計的検定を通じ、中国人留学生と中国人以外の留学生における観光行動の違いを解明した。中国人留学生は、中国人以外の留学生よりも、観光旅館に宿泊し、またテレビなどの公共メディアから観光情報を入手している傾向がより強い点を明らかにした。

第5に、生活時間調査を通じて、北大に長期に在籍している留学生ならびに外国人研究者に会いに来日した親族（VR側）と、その親族受入側である留学生ならびに外国人研究者（受入側）の観光行動に関する事例分析を実施した。VR側が子供を連れて来日したか否か、また平日か休日かの違いが、VR側の在宅時間割合や外出時間帯に影響する点が確認された。訪日中におけるVR側と受入側の食事時間は、日本平均と比べ、長い傾向が見られた。VR側と受入側の全食事内容を、和食・洋食・中華に分類した結果、和食の食事回数が最も少なく、中華の食事回数が最も多い点が明らかとなった。VR側と受入側の教養・娯楽時間と買物時間は、いずれも日本平均よりも長い傾向にある点も明らかとなった。

第6に、旅行の動機や満足度などを評価するためのアンケート調査と訪日中の消費動向を解明するための消費実態調査を通じて、北大に長期に在籍している留学生ならびに外国人研究者に会いに来日した親族（VR側）と、その親族受入側である留学生ならびに外国人研究者（受入側）の観光実態に関する事例分析を実施した。観光への満足度については、食事を除いた全観光項目で、VR側が受入側より高い傾向がみられる点、VR側と受入側が訪日中に出かけた日帰り旅行や宿泊旅行については、旅費を安価に抑えようとする傾向がみられる点が明らかとなった。土産・買物の消費額は、全訪日期間における全消費額の中で、最大費目である点、また外出時間割合が増加すると、1人1日当たりの消費金額も増加する傾向がみられる点も明らかとなった。

以上のように、本研究は、留学生と親族訪問客を事例として、訪日外国人の来日期間中における観光の態様を、実証的に分析したものである。本論文の主な新規性は、第1に、毎日の生活行動すべてを時刻ごとに調査する手法である生活時間調査という手法を観光研究に適用し、訪日外国人による観光行動の詳細な実態を解明できた点である。第2に、生活時間調査と同時に、消費実態調査も実施し、訪日外国人による観光消費の詳細な実態を解明できた点である。こうした生活時間調査と消費実態調査を通じた事例分析だけではなく、従来の観光研究で多用されてきたアンケート調査分析も実施した。このような多様で、また新しい研究アプローチの採用により、本論文では、留学生と親族訪問客を事例として、既存研究では十分に解明できなかった訪日外国人における観光の態様を、より詳細な内容として、明らかにすることができたものとする。

本研究の成果は、以上のような学術的貢献だけではなく、訪日外国人数増加のための観光政策を推進していく上で、また留学生と親族訪問客を対象とした新しい観光市場の展開を推進して行く上での、基礎的知見としても、有用だと考える。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 本 康 貴

副 査 教 授 飯 澤 理 一 郎

副 査 助 教 中 谷 朋 昭

学 位 論 文 題 名

訪日外国人における観光の態様に関する実証研究

－留学生と親族訪問客を事例として－

本論文は 8 章からなり、図 73、表 44、文献 171 を含む頁数 173 の和文論文であり、別に参考論文 3 編が付されている。

訪日外国人客（訪日外客）を増やすことは日本における観光政策の重要課題である。しかし、訪日外客数の政策目標達成は容易ではない状況にある。そうした中、訪日外客の一部と位置づけることのできる留学生の人数は、増加傾向にある。日本政府は留学生 30 万人計画を発表し、留学生受入を推進している。留学生は、日本に居住する外国人として、日本国内を旅行することなどを通じ、日本における観光業や地域経済の振興に貢献することも期待される。さらに、留学生の増加は、留学生に会うために海外から日本に来る留学生の親族や友人を増やす効果も期待される。留学生や親族友人訪問（Visiting Friends and Relatives）を目的とした外国人来訪客（VFR 客）については、観光市場における重要なセグメントの一つとしてとらえられ、国際的には多数の研究例がある。しかしながら、日本において、留学生や VFR 客に着目した観光研究は少ない現状にある。

本論文の課題は、訪日外国人の来日期間中における観光の態様を、実証的に明らかにすることである。分析対象者とした訪日外国人は、次の通りである。第 1 に、留学生の観光動向を解明するためのアンケート調査対象者は、北海道大学（北大）に在籍する留学生とした。第 2 に、観光実態に関する事例分析の対象者も、北大に在籍している留学生ならびに外国人研究者に会いに来日した親族と、その親族受入側である留学生ならびに外国人研究者とした。また、実態調査の対象者は中国人とした。

第 2 章では、日本における親族友人訪問客の動向と特徴を、統計データ分析によって整理した。親族訪問客は増加傾向にある点、親族友人訪問客の訪日情報源は、友人や親族からの口コミが多い傾向にある点などを明らかにした。

第 3 章では、留学生を対象者としたアンケート調査を通じ、留学生の北海道内（道内）における観光動向を分析した。留学生の道内訪問先および道内観光目的は外国人観光客全体と似ている傾向がみられる点、留学生は外国人観光客全体よりも道内観光全体に対する満足度が低いという傾向がみられる点などを明らかにした。

第 4 章では、留学生データを用いた統計的検定を通じ、日本語会話能力の違いが観光行動にどのような違いをもたらすかを分析した。日本語の会話能力が高い留学生は、低い留学生よりも、多くの観光地を訪問し、ドライブや郷土料理を楽しみ、ホテル・

旅館に宿泊し、またインターネットから観光情報を入手している傾向がより強い点などを明らかにした。

第5章では、留学生データを用いた統計的検定を通じ、中国人留学生と中国人以外の留学生における観光行動の違いを分析した。中国人留学生は、中国人以外の留学生よりも、観光旅館に宿泊し、またテレビなどの公共メディアから観光情報を入手している傾向がより強い点などを明らかにした。

第6章では、毎日の生活行動すべてを時刻ごとに調査する生活時間調査を通じ、来日した親族（VR側）と、その親族受入側である留学生ならびに外国人研究者（受入側）の観光行動に関する事例分析を実施した。VR側が子供を連れて来日したか否かの違いがVR側の在宅時間割合や外出時間帯に影響する点が確認された。全食事内容を、和食・洋食・中華に分類した結果、和食の食事回数が最も少なく、中華の食事回数が最も多い点なども明らかとなった。

第7章では、旅行の動機や満足度などを評価するためのアンケート調査と訪日中の消費動向を解明するための消費実態調査を通じ、VR側と受入側の観光実態に関する事例分析を実施した。観光への満足度については、VR側が受入側より高い傾向がみられる点などが明らかとなった。土産・買物の消費額は、全訪日期間の全消費額の中で、最大費目である点、外出時間割合が増加すると1人1日当たりの消費金額も増加する傾向がみられる点なども明らかとなった。

以上のように、本研究は、留学生と親族訪問客を事例として、訪日外国人の来日期間中における観光の態様を、実証的に分析したものである。本研究は、従来の観光研究で多用されてきたアンケート調査分析のみならず、毎日の生活行動すべてを時刻ごとに調査する生活時間調査と毎日の消費内容すべてを調査する消費実態調査を同時に観光研究に適用し、既存研究では十分に解明できなかった訪日外国人における観光の態様を、より詳細な内容として、明らかにしている点で、高く評価できる。本研究の分析結果は、訪日外国人数増加のための観光政策を推進していく上で、また留学生と親族訪問客を対象とした新しい観光市場の展開を推進して行く上での、基礎的知見として有用である。

よって、審査員一同は、師耀軒が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。